

# 日本記者クラブ会報

第14号  
1971年  
4月10日発行

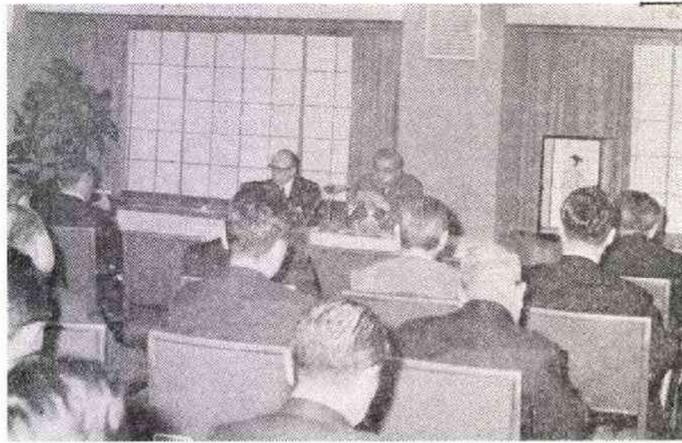
東京都千代田区内幸町一ノ一  
帝國ホテル東館 100  
日本記者クラブ 発行  
電話 591-1622、3  
504-1111 内線五九三

## 二年目を迎えた記者クラブ

### 原理事長再選さる

//公平にキリキリ舞い//

陽春三月になって、クラブ行事も活気を帯びてきた。まず三日に都知事立候補の予定されていた秦野章氏の昼食会が行なわれた。参加者九十名で盛況。//四兆円ビジョン//を中心に質疑応答。つづいて九日には美濃部亮吉氏の昼食会を予定していたが、この方は三日におわる予定の都議会が六日、さらに九日と延長になり、美濃部氏の側から延期の申し入れがあった。そこで告示前ということでは十六日を予定して、改めて会員に昼食会の案内を印刷したが、発送直前、それも都議会延期のあおりをくった行政事務の渋滞のため知事



第三回総会(クラブ・ルーム)

の時間がさげなくなつたとの美濃部氏からの連絡で再度開催不能のやむなきに至つた。十七日からは知事選挙告示で選挙戦に入ったので、遺憾ながら美濃部氏の昼食会は取り止めとなつた。この間、//公平//を期せうとする事務局は、知事側との交渉、会員との連絡にキリキリ舞いの忙しさだった。

### 会員多数の藤山氏昼食会

十九日の定例昼食会は、日中政治会談から帰つた藤山愛一郎氏がゲストだったが、参加者百五名という大人数で、佐藤首相に次ぐ多数となつた。質問もきわめて活発で、次から次々とあつた。特に日本と台湾との間の条約廃棄問題について藤山氏の考えをただす質問が多かつた。記者会見は五日のインドネシア外務省のアルフィン・ベイ氏(前駐日大使館プレス・アタッシェ)とソ連海洋観測船の観測隊一行(十九日)、

さらにドイツのVIIロケットの生みの親で、その後アメリカにわたつて人工衛星、宇宙ロケットの開発の責任者として有名なフォン・ブラウン博士(二十六日)と三回行なわれた。ベイ氏は「最近のインドネシアの事情」という演題の講演をしたが四十名の参加者は熱心に質問、ベイ氏は終始達者な日本語でやりとりして、その内容は好評だった。ソ連の海洋観測船ではウージンツェフ博士(ソ連科学アカデミー会員)はじめ五人の隊員のほか日本人同乗隊員四名も来会。地球のマントル上層部の観測を中心に行なつた太平洋上五か月の観測結果を説明した。この会見にはソ連の報道陣が多数詰めかけ、写真、映画の取材で熱気をはらむものになつたのが特徴的だった。

また十五日には、万博映画の試写があり、会員招待を行なつたが、東京会場は一七〇名、大阪会場二〇名

### 日本記者クラブ会員数

四月一日現在  
会員社 一三七社  
会員数 八七三名

の希望会員に招待状が送られた。

二年目の活動に新味を

クラブの昨年十一月、十二月二か月分の決算と役員改選を議題にした総会は十一日に開かれ、決算と四十六年度予算が承認されたほか、新役員は別項(4、6ページ)のようにきまった。新理事会では、まだクラブ創立一年で基礎がじゅうぶん固まっていないからの理由で、原四郎前理事長が再選され、さらにその活躍が期待されることになった。企画委員会、総務委員会の顔ぶれもきましたが、二年目に入ったクラブは、想を新たにして、全会員の要望にこたえる活動を展開していこうというのが、事務局を含めて新役員の決意である。

会員の異動

入会

(登録クラブ員)

滝沢 寛 読売新聞出版局長次長週刊読売編集部長  
吉田 恭 新潟日報東京支社長  
内山 精一 東北放送常務取締役(東京支社在勤)  
森 実 日本経済新聞編集局長次長

深川 誠 日本経済新聞政治部長次長

岡田 巨弘 政治部長

樋口 剛 経済部長

吉田 寿孝 経済部長

吉田 安伸 工業部次長

石本 晴夫 工業部第二部長

鮫島 敬治 編集委員

菅野 徹 外報部長

神良 克巳 大阪本社編集局長

狩野 近雄 スポーツニッポン新聞代表取締役社長

尾賀 芳照 信越放送報道部長

芥川 将 毎日新聞西部本社代表

山田 肆郎 東奥日報東京支社長

大山 恵佐 日本海新聞社取締役社長

吉村 達二 読売新聞週刊読売編集部長

岸田 誠吾 新潟日報取締役東京支社長

児島 高明 東北放送取締役報道制作局長

笹川 了平 内外タイムス社社長

野口 至深 取締役副社長

小林 茂 取締役

玉城 鎮夫 取締役総務

遠矢 直輝 編集局長

江刺家重貞 編集局長

吉川 亨 編集局取材本部

森田 茂 内外タイムス 副部長

古川 昭三 政経部長

矢崎 泰久 編集局編集委員

幅 泰男 信越放送人事部部長

狩野 近雄 毎日新聞常務取締役西部本社代表

田中 子玉 テレビ西日本代表取締役社長

古川 清徳 新大阪新聞取締役編集局長

新谷 波夫 国際局長

秋元 全三 東奥日報東京支社長

役職変更

紺野 靖彦 読売新聞解説部次長

末弘 達雄 〃

嶋元 謙郎 〃

近藤 汎 外報部長

小倉 貞男 社会部通信主任

石井 経夫 スポーツニッポン新聞東京本社取締役制作局長

荒尾 達雄 共同通信社理事待遇、社長室長

斎藤 忠夫 編集局次長

堀 四志男 日本放送協会教育局長

福井淳一郎 報道局次長

石田 端 政治部副部長

島 桂次 政経番組部長

高橋 雄亮 経済部副部長

畑 源生 政治部記者

大山 昊人 日本放送協会経済部記者

岩崎 俊夫 〃 外信部記者

山内 雅夫 〃 政経番組班チーフ

田沼 修二 〃 デイレクター

田沼 修二 〃 報道局次長

広 堅太郎 〃 報道局チーフディレクター

住友 公一 〃 国際局欧米部長

清洲 耕二 〃 教育局教養班部長

三浦 清 〃 芸能局次長

三善 清達 〃 芸能局洋楽班チーフディレクター

金沢 克郎 スポーツニッポン新聞社取締役社長室長

荒井 良徳 〃 編集局長

代表・代表代理変更

中国新聞社 代表 山本 朗 代表取締役社長

代表代理 下村 利昭 東京支社編集局長

西日本新聞社 代表代理 小屋 修一 東京支社次長

代表代理 兼編集長

電話番号変更

四国新聞社 (61) 1111

大和タイムス (22) 6261

政治部記者

政治部記者

政治部記者

政治部記者

# 世界の記者クラブ

## チェコ・ジャーナリスト同盟

井沢正忠

(日本経済新聞社外報部次長元プラハ特派員)

チェコにかぎらずソ連圏には記者クラブといえるものは存在しない。すべてが国営企業であり、新聞記者もいわば国家公務員であるという国がからいえば記者個人の資格で勝手にクラブを結成することは考えられないし、ましてブルジョア国家の新聞記者と同じクラブを作ろうという発想は期待する方がムリというもの。

しかし、そのかわりといつては変だが、ジャーナリスト同盟という組織はガッチリしている。この同盟には個人の資格ではいり、かりに年金生活にはいったとしてもメンバー・シップを失うことはない。

プラハの中心街、「古い街の広場」は宗教改革の犠牲者、ヤン・フスの銅像がある広場として有名だが、こ

のフス広場からブルタワ川に向かつて走る大通りにチェコ・ジャーナリスト同盟の古色蒼然とした建物がある。通りの名はパリ通り。十九世紀末から二十世紀初め、ハプスブルグ帝国花やかなころにパリに似せて作った通りだが、チェコの作家カフカが生まれ育った家が、そのまま残っているというゆいしよある通りだ。

このジャーナリスト同盟は国民戦線の一員として政治、社会活動を認められたれっきとした団体、といえぼいかめしいが、一階のレストランはチェコ人記者はもちろん、外人記者も自由に出入りできる。夜は早くしまつてしまふのはタマにきずだが、百人近くはいれるレストランは昼めしどきには内外の記者が集まつてにぎやかなことになる。

「モノいえば唇さむい」昨今のチェコでもここだけは自由なところ。//右翼修正主義者が狩りが始まったころ、プラハ市委員会から除名されたばかりのキンツル記者と会ったときなど、フサーク政権の批判を大声でやられてこちらがびっくりしたほどだった。

ジャーナリスト同盟の性格上、この建物で同盟主催の記者会見が開かれることはゼロだが、会館の一部を使つての記者会見は時たま開かれる。

しかし、プラハを訪れる外人記者は必ずこの建物を通りすくすことはできない。「外人記者がプラハにやってくるのはいいが、取材といえ、よくてタクシーの運転手、ひどいになると夜の姫君だから話を聞いて、原稿を打たれてはかなわぬ。まともな話も聞いてもらわねば」ということで、ジャーナリスト同盟のなかには外人記者専用のインフォメーション・センターが活躍している。六八年のチェコ事件以来このセンターを訪れた日本人記者は約六十人とか。

ワルシヤワで、あるいはブクペス

トでおなじみの顔にぼったり出会うのもこのインフォメーション・センターでだ。五十平方メートルたらずの小さな部屋だが、二人のベテラン記者と一人の美人秘書がこのセンターで英、独、仏、露と相手によってことばを変えながらチェコ情勢の//正確な解説を行なっている。

### 新着購入図書

朝日年鑑 46年度版

フィッシュ・オン (朝日新聞社)

奔馬 (三島由紀夫著)

暁の寺 ( )

春の雪 ( )

テレビ文明への告発状 (ニコラス・

ジョンリー著)

大恐慌 (J・K・ガルブレイス著)

紛争の一般理論 (K・E・ポール

ディング著)

科学としての経済学 ( )

朝鮮史入門 (旗田 巍著)

日本の韓国併合 (山辺健太郎著)

遊びと人間 (R・カイヨワ著)

誰も書かなかったソ連(鈴木俊子著)

セクサメロン (ベントクト・アンデル

ベリー編)

美女と皇帝の国 (鈴木了司著)

### 第三回総会

(昭和46年3月11日(木)クラブ・ルーム)

日本記者クラブ第三回総会は、出席社三三、委任社八三、計一六六会員社の出席をもって成立(定足数九二)、原理事長司会のもとに開かれ、昭和45年11~12月の決算報告(別稿)、真崎監事の監査報告に続いて、昭和46年度の予算報告(別稿)、昭和45年11~12月の

## 財産目録

昭和46年12月31日現在

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
繰越剰余金の部		円	
現 金	61,340	仮 受 金	30,000
銀 行 預 金	310,456	特別準備積立金	6,250,000
仮 払 金	100,000	退職準備積立金	323,400
立 替 金	18,000		
未 収 会 費	414,000	繰越剰余金現在高	6,892,036
敷 金	5,718,240	(内当期剰余金)	29,376
有 価 証 券	300,000		
特別準備積立預金	6,250,000		
退職準備積立預金	323,400		
小 計	13,495,436	小 計	13,495,436
繰越通常財産の部		繰越通常財産現在高	
什 器	1,581,525		1,581,525
小 計	1,581,525	小 計	1,581,525

合計 期末正味財産現在高 8,473,561

### 財産目録内訳

科目	金額	備 考
現 金	61,340	手元現金
銀 行 預 金	310,456	三和、住友銀行
仮 払 金	100,000	クラブ・ルーム手元資金
立 替 金	18,000	昼食会費未納分
未 収 会 費	414,000	未納会費 21社
敷 金	5,718,240	帝国ホテル借室敷金
有 価 証 券	300,000	電話債券
特別準備積立預金	6,250,000	三和銀行
退職準備積立預金	323,400	住友銀行
仮 受 金	30,000	46年1月~3月会費預り
特別準備積立金	6,250,000	特別準備金
退職準備積立金	323,400	退職準備金
什 器	1,581,525	事務机他什器

事業報告(会報第13号掲載)が行なわれ、いずれも異議なく了承された。  
 ついで役員改選の議題にはいったが、改選の方法について、理事長一任の発言があったので、原理事長から「役員選考委員会を設けて役員を選出にあたってはどうか」との提案が出され全員了承、つぎの六会員が選考委員に指名された。  
 斎藤栄一(毎日新聞)、伊藤 沆(東京新聞)、荒尾達雄(共同通信)、深山 栄(北日本新聞)

橋本 博(東京放送)、江尻 進(日本新聞協会)選考委員はただちに別室で協議した結果、つぎの理事十八名、監事二名を選考、斎藤委員から総会に報告全員異議なく承認された。その後、直ちに新理事会が別室で開かれ(第16回理事会記録参照)、新理事長に原四郎理事を再選した旨、田代理事から総会に報告、承認された。最後に、原理事長から各委員会委員を委嘱(6ページ参照)して閉会した。

- (理事長)原 四郎(読売新聞社)  
 理事 田代 喜久雄(朝日新聞社)  
 斎藤 栄一(毎日新聞社)  
 武山 泰雄(日本経済新聞社)  
 中山 了(サンケイ新聞社)  
 伊藤 沆(東京新聞社)  
 高田 秀二(共同通信社)  
 篠田 寛(時事通信社)  
 高田 景次(秋田魁新報社)  
 稲元 寛介(神戸新聞社)  
 三ッ野真三郎(北国新聞社)  
 平野 宗義(日本放送協会)  
 橋本 博(東京放送)  
 宮崎 武(日本テレビ)  
 久野 昌輝(フジテレビ)  
 泉 毅一(日本教育テレビ)  
 江尻 進(新聞協会)  
 杉山 一男(民間放送連盟)  
 小田 泰秀(西日本新聞社)  
 真崎 貞夫(毎日放送)

予 算

自 昭和46年1月1日  
至 昭和46年12月31日

科 目	予 算 額
収入の部	
会費収入	39,336,000
会員社基準会費	16,800,000
個人会費	22,536,000
雑収入	180,000
預金利息	175,200
赤電話手数料	4,800
収入計	39,516,000
支出の部	
運営費	18,132,000
借室料	12,720,000
会議費	252,000
講演会費	2,400,000
会報発行費	1,200,000
管理費	240,000
什器備品費	1,200,000
運営雑費	120,000
事務関係費	3,660,000
通信費	1,200,000
交通費	180,000
印刷費	1,080,000
消耗品費	300,000
会員証作成費	120,000
事務委託費	600,000
事務雑費	180,000
總會, 懇親会費	990,000
人件費	8,459,000
給与	4,878,000
賞与ほか諸手当	3,459,000
厚生費	122,400
諸積立金	7,520,400
特別準備積立金	7,200,000
退職準備積立金	320,400
予備費	754,200
支出計	39,516,000

収支計算書および内訳

自 昭和45年11月1日  
至 昭和45年12月31日

△印=赤字

科 目	予 算 額	決 算 額	対 比 増 減
収入の部			
会費収入			
会員社基準会費	2,820,000	2,820,000	0
個人会費	3,753,000	3,759,000	6,000
雑収入			
預金利息	0	27,596	27,596
赤電話手数料	0	1,200	1,200
収入計	6,573,000	6,607,796	34,796
支出の部			
運営費	2,910,000	2,883,066	26,934
借室料	2,120,000	2,101,230	18,770
会議費	40,000	39,740	260
講演会費	400,000	293,901	106,099
会報発行費	200,000	208,337△	8,337
管理費	30,000	30,645△	645
什器備品費	100,000	193,900△	93,900
運営雑費	20,000	15,513	4,687
事務関係費	470,000	439,509△	30,491
通信費	150,000	178,570△	38,570
交通費	40,000	25,741	14,259
印刷費	120,000	97,280	22,720
消耗品費	40,000	15,777	24,223
会員証作成費	4,000	2,000	2,000
事務委託費	60,000	60,000	0
翻訳タイプ費	16,000	5,000	11,000
事務雑費	40,000	55,141△	15,141
總會, 懇親会費	400,000	430,564△	30,564
人件費	2,270,000	2,220,281	49,719
給与	775,000	758,609	16,391
賞与ほか諸手当	1,475,000	1,441,752	33,248
厚生費	20,000	19,920	80
諸積立金	446,000	446,000	0
特別準備積立金	400,000	400,000	0
退職準備積立金	46,000	46,000	0
予備費	77,000	159,000△	82,000
支出計	6,573,000	6,578,420△	5,420

総務委員

- 齋藤 栄一 (毎日新聞社)
- 田代喜久雄 (朝日新聞社)
- 武山 泰雄 (日本経済新聞社)
- 中山 了 (サンケイ新聞社)
- 平野 宗義 (日本放送協会)
- 橋本 博 (東京放送)
- 江尻 進 (日本新聞協会)
- 杉山 一男 (日本民間放送連盟)
- (会報小委員)
- 高橋 照明 (東京放送)
- 中沢 道明 (読売新聞社)
- 大森 建道 (日本民間放送連盟)
- 浅野 修 (日本新聞協会)

企画委員

- 高田 秀二 (共同通信社)
- 小島 章伸 (日本経済新聞社)
- 建部 直文 (北海道新聞社)
- 吉井 勝人 (京都新聞社)
- 久野 昌輝 (フジテレビジョン)
- 泉 毅一 (日本教育テレビ)
- 山田 年栄 (日本新聞協会)
- (国際小委員)
- 河村 欣二 (朝日新聞社)
- 石塚俊二郎 (毎日新聞社)
- 水上 健也 (読売新聞社)
- 萩原 宏平 (日本放送協会)
- 岩立 一郎 (日本テレビ放送網)

笠置 正明 (日本新聞協会)

第18回企画委員会

(昭和46年3月4日(木)別室)

三、四月のクラブ行事を協議、藤山愛一郎氏の昼食会は、外人記者にも開放することを確認、四月中旬に新任韓国大使を昼食会に招待することを決定した。その他ゲストとして谷村公取委員長、佐藤首相、友納千葉県知事などの名前があげられたが、政治家は選挙後に、もう一度検討して招待者と日時を決定することにした。なおクラブも発足二年目にはいったので、地方会員のために東京以外の地域でランチョンを開催する案、会員のために、医師評論家の話などを聞く案、趣味の会(囲碁、ゴルフなど)を作る案などが出され、検討することにした。懸案の見学会は、四月下旬か五月中旬、横須賀の米海軍基地を視察することに決定した。

第1回監事会

(昭和46年3月5日(金)別室)

昭和45年11~12月の会計監査を行

ない、帳簿、証票などの記帳処理を監査、確認した。

出席者 眞崎貞夫、小田泰秀、事務局 前田、春原、佐谷日本新聞協会 会計主管

第15回理事会

(昭和46年3月10日(水)別室)

昭和45年11~12月度決算書および事業報告を承認した後、12月理事会で決定した昭和46年度予算のうち、別室の借室料(特別準備積立金より支出)、貸室収入(雑収入の中の別項で処理)の処理を再確認し、第4回総務委員会で決定したシンボルマーク募集の賞金を予備費から支出することを承認した。

出席者 原理事長、田代、齋藤、中川、武山、伊藤、小笠原、吉井、高橋(橋本代理)、宮崎、久野、泉、江尻、杉山、監事 小田、眞崎、事務局 前田、春原

第16回理事会

(昭和46年3月11日(木)会議室)

田代喜久雄理事が仮議長となつて開催、新理事長に原四郎理事を再選

した。ついで原理事長から、委員会の改組 Ⅱ 会報委員会を廃止して、会報小委員会は総務委員会の下部機構とすること Ⅲ および総務委員会、企画委員会、各小委員会の委員委嘱者についてはかり、いずれも了承された。

出席者 田代、齋藤、原、武山、伊藤、高田(景)、三ツ野、橋本、宮崎、久野、泉、江尻、事務局 前田、春原

「別室」大好評

二月からオープンした「別室」の評判がよい。三月は二十三回会員社または会員諸氏の利用を受けている。二十三回といえ、休日を除くほとんど毎日使われていることになり。しかし夜、昼二回使えば、この倍以上の会合に利用できるのだから、さらにいっそうのご利用を期待したい。静かで落ち着けることが好評のもと。

お詫び モブツ大統領昼食会の際は急拠、会場を変更いたしましたこと迷惑をおかけしました。お詫びいたします。

# 声の会

一年・わが

プレスクラブ

ナカムラ タツシ

K・E・ポールディングさんは言いました。記者、編集者、発行者は人類の将来にとってもっとも重要な知識産業に属する人間であり、そのことを自ら認識しなければならぬと。

ポールディングさんはその大きな顔容と体軀の全体をゆるがしながら強いどもりをつづけつづけそれを強調されました。私はポールディングさんをこの世界でもっとも尊敬し、その著書の一冊を手を持ち歩いてさえ誇りにし、著者のあたたかみを感じるほどなので、彼の言われることは信じるのです。

いまわれわれの当面している重要問題、戦争、平和、貧困、疎外感、内面抗争——そのうえ人間の不幸といった問題はなんといっても、ものを理解するという問題に属するのだと、師は言われます。

昭和44年11月に発足した日本記者クラブですが、その第一回のプレス・ランチョンでフランスの元首相に逢いました。彼はいいました。

人間相互の戦いの時代は終わったと。これからの戦いは偶然に対する戦いであり、また神に対する戦い、無知に対する戦いになると。政治は人間の感ずる不安というものに対してそれにこたえなければならぬと。

私たちの周辺にはいま生きてゆく上の不安がいっぱいとまいています。政治がよくそれにこたえているのでしょうか。われわれの新聞がよくそれに対応しているのでしょうか。いっそう不安をかきたてているようなことを犯してはいないでしょうか。われわれは読者に対して、なぐさめと強いはげましを時に与えていることがあるのでしょうか。フランスの元首相は小柄な、しかし元気な老人で、陽気そうに思える夫人を伴って来日し、フランス人らしい情熱に満ちた口調を私たちに浴びせ続けてやまないのでした。

夏が来、秋がそれに代わり、続いて冬が去り、そしてふたたび春がめぐりました。その間世界の教授が、大主教が、政治顧問が、大統領が、銀行家が、外相が、戦略家が、カメラマンが、国連事務総長などが入れかわりたちかわり午宴会や記者会見や講演会にやってきました。

はげしい一年の移り変わり、世界の、あるいは社会の変化と進歩は、技術の革新と相まってめまぐるしい展開を続け、殆ど混乱といていいほどの現実をつくりあげつつある七十年代です。

会員の ある一記者は告白しました。

われわれの仕事は日増しにむずかしさを増している。取材対象と舞台が複雑化しているのに対しボクらの仕事は追いついていけない。日常の仕事の中でそれがこなされていらない。いちばん遅れているのは僕たち記者なのではなからうかと。

それをきいていて私もわがことのように身をけずられるような辛い思いがして彼に同情するのです。それに答えてやはり私たちの先輩評論家は「記者の仕事は社会に対するインフルエンスにあり、自愛を祈る」と非情なまでの簡潔なことを投げ

返されました。それが短かつただけに壮重に響きました。われわれは二律背反の重圧に包圍されつつもそれを突破していかねばなりません。

欧州共同体の情勢、ベトナムの戦火、貿易の自由化、環境の破壊、通商条約、さまざまのテーマがなまなましい報告と予見で語られました。近くは国内の白髪政治家が中共から帰ってきて、われわれの会見にこたえました。その問題への対処に自己の政治生命を賭けようとしている彼は、簡単な思想をよりどころとし、できるだけ平易なことを選択しようとする方法で自らの所感を辛抱よく語りました。

地球上に起こることがらはみなむずかしい問題ばかりのように思われます。招待ゲストやスピーカーはそれれいずれも己れの後ろにある背景をにないつつ体を、心を砕くような苦しみに堪えつつ、考えつつ発言し、自己の役割を終えるところに席から立ち去って行きます。

それは夏の一日でした。軍国の記者をえがいた映画の試写会がありました。そのなかで私も知っている先輩記者が時の軍閥に対して激しい抵

抗を示した事件がストーリーにとりあげられていました。怒りをこらし震えをおびた声で憲兵に切り返した同社の編集総長の勇氣も印象的でした。

記者精神、リポーター魂、ライタースピリットよ、つねに燃えよ。

われらが記者クラブ理事長は「取材が変わるから記者も変わる」と名言をはかれました。

それら一年の印象を繰り返してかみしめています。

ふたたびポールディングさんのことば。

「ジャーナリスト・われわれの役割りは大衆を教えること、またその知識を改善していくという意味でわれわれは先生であって、その役割りを果たさなければならぬ。」

(愛媛新聞東京支社長)

## 国民的合意形成

### の場に

稲田 正義

戦後の日本経済の目ざましい発展ぶりについては外国人も驚嘆してい

るところで、古くはロンドン・エコノミストの一連の分析から、近くはロベール・ギラン、ホーカン・ヘドバーク、ハーマン・カーンなどの著作が続いて登場して、内外の注目を集めている。そこでその原因としてこれまでわれわれ日本人がむしろ弱点ではないかと考えていた終身雇用制、年功序列給からオーバーボウイング、はては官僚機構まで数えあげられて、日本人自体もあつけにとられていくというのが実情であるう。

さてここまで論及が進んでくるならば、我田引水めくが日本のジャーナリストの一員としてぜひとも指摘してほしいことがある。それは世界に類例をみないクオリティ・ペーパーにしてクオンティティ・ペーパーの存在である。単にクオリティ・ペーパーというなら海外にもザ・タイムズ、ニューヨーク・タイムズ、ル・モンド、フィガロなど伝統と権威を誇る高級紙は少なくないが、その発行部数はいずれも百万部以下だ。ところがひとり日本にだけこれらの高級紙に匹敵する高度の知的内容をもちながらも、部数が朝、夕刊合わ

せて七百万部、八百万部に及ぶ大新聞が三紙もあり、同様な体裁と内容をもつ有力地方紙も多数ある。わたしはこうした高級紙があまりなく普及していることこそ看過できない日本の強味だと信じ、これにたずさわっていることを内心誇りに思っている。

もちろんその恐しさも忘れてはならない。太平洋戦争の破滅にまで及ぶ歴史の過程で日本の新聞がその大きな影響力をもつばら戦争協力の面で発揮したという苦い経験を、二度と繰返すようなことがあっては相すまないことだ。そうした観点からすれば日中問題をめぐって有力新聞の論調が、当面二分された形であることはかえって有意義かとも考えている。しかし最後は一本にまとまるために、このさいじっくりと腰をすえてお互いに一辺倒に陥いることなく論議をつくしてゆきたいと思う。日本記者クラブの存在がこうしたナショナル・コンセンサスの形成の面でも大きな役割りを果たすにいたるところを心から願っている。

(毎日新聞社企画調査局長)

マス・メディア・セ

ンターとしてのの

クラブに

南風原英育

日本記者クラブが実現して、何よりもありがたく感じたのは、座談会などの会合にそのルームの利用価値が高いことである。これまで座談会ひとつ聞くにしても、その場所に困った。場所を決めたにせよ、参加者への案内、会場の雑・騒音に悩まされ通しだった。それがわかり易い場所、静かな部屋で、食事等にも事欠かないようになった。おかげで学者先生方をはじめ、おらが国さの代議士にも気軽にきてもらうことができた。これがまずプラス。

つぎに数ある会見。その内容は地方紙単独では容易に実現し得ないものだけにその効果は大きい。しかし半面、地方にとって直接的なテーマでないことも多い。たまには沖繩の屋良主席や現地代表をゲストに、愛知外相、山中総務長官、中曽根防衛庁長官、秋田自治相ら関係省庁大臣と復帰を目前に控えた現地のナマの

声、疑点を、また本土政府首脳のハラを率直に討論させる企画などいかなるものでしょう。(あまり手前みその必要も望みも知れないが、公害、地域開発、文化等本土各地方の問題や焦点も同様にとり上げる)

要望のついでにもう一つ二つ。上京してくる記者の宿泊施設、これは地方紙支社の苦勞の一つ。この問題には前にこの会報でもとり上げられたが、ぜひ実現してほしい。これはまた待機の中にも緊張の連続である記者の休息の場、仮睡室(?)、あるいは仕事の都合で帰宅できなかつた者にも利用できると思う。

いまクラブの中には、ライティング・デスクも設けられ、ロビーにはバー、コーヒーショップもでき、憩いの場、親睦の場としていちだんと充実し、親しみがでたが、それともにもっと欲をいえば、資料室もほしい。現在購入新着図書などもあるが、マスコミの新しい動向を示す資料、各社の目立った企画(新聞協会賞受賞ものとか)、論調(内外の)など一目でわかる資料展示。これは協会審査室とのタイアップで設けられたらどうでしょう。そして加入会員

社の全記者が、そのつど気軽に活用できるようにする。そうなれば文字通りマス・メディア・センターとしての機能が、いよいよ備わっていくと思う。望外の望みでしょうか。

(沖縄タイムス東京支社編集部長)

## ある記者会見と

### 地方会員

町野吉甫

ゲルマン系独特の角ばったいかめしい顔、広い額、一語一語かみしめる様な発音で静かに語るブラウン博士。彼の造ったロケットは、かつてはV2としてドーバー海峡を越えて殺人兵器に、そして今は月の神祕を開き、人類の夢と誇りをのせて宇宙へと馳る。ある記者が、科学者としての道義感を質したのに対して博士は、目を見開いて答えた。

科学と技術は道徳的次元にはない。生産者がメスを造る、そのメスを使って、上手な外科医は人の生命を救う。下手な外科医は人の生命を奪う。しかしこの外科医に善も悪もない。メス自身にももちろん善悪はない。ましてや生産者にも善悪はな

い。ただし良心に悩まされるのであれば、その生産者は、科学者は、そのものを造らなければよい。生産された物は、その時々の人間社会の環境が使い方を決める。私は自分の祖国が戦争をするというのであれば銃をもって戦場に行く、これは古今不変である。

それまで静かだった口調が途端に早口になり一気にしゃべり終った。クラブルームでのNASAブラウン博士の記者会見である。この博士の答えはいささかシヨックであった。ここでその是非について論じるつもりはないが、活字からの博士に対する印象よりは、全く強烈で小人数の会見ではあったが親ぼく機関としてのクラブの性格とは違った重要な一面をみた感があった。

ところで会員名簿をみると、地方会員の場合親ぼくの面のみを考慮した会員構成といえないだろうか。特に民放の報道担当者は当初「記者クラブ」については、今でも一部にその閉鎖性があるがかなり苦勞したはずである。会員以外の人も、外人記者にも開放しているこの、日本記者クラブの現状は大変好ましいといえ

るだろう。せっかくこの場をもつと積極的に利用したいものだ。民放地方会員諸兄の奮起を望む次第である。

(中国放送東京支社報道部長)

## 日本派に冷たい日本会社

—ベイ博士の話から—

インドネシア外務省のアルフィン・ベイ博士の講演会はオフレコで行なわれたが、その発言内容の中でぜひご紹介したい点を、ベイさんのご了解を得たのでお知らせします。

「インドネシアの政官界ではアメリカで教育を受けたいわゆるアメリカ派が主流を占めている。日本への留学生も多いのだが、あまりふるわない。それは日本での教育内容が中途半端であることと同時に、アメリカのインドネシアに進出している会社はほとんどアメリカに留学したインドネシア人を採用して、さらに力をつけている。これに対して日本のインドネシア進出会社は日本留学組に冷たく、あまり使おうとしない。そのためアメリカ派の社会的地位が高くなり、人間的にもびる結果になる。この点、是非考えてほしい」。

ゲスト 藤山愛一郎・日中国交回復促進議員連盟会長

## 日中国交回復への道

昭和46年3月19日（金）

帝国ホテル（スカイルーム）

私が今度中国へ参りましたのは、昨年四月、松村先生に同行して行った時、覚書交渉のおわりに一行とともに周総理に会ったわけですが、その時は十分程で、



写真左から久野理事、高田企画委員長、藤山氏、原理事長、泉理事、前田事務局長。

本当に忌憚らない意見の交換をするというわけにはま  
いりませんでした。周総理はご承知のように西欧の外  
交官型の儀礼をもってお客様を迎える方ですから一人  
一人何らかの話題で話をかける。そこで「秋に行っ  
て、忌憚らないお話をしたい」と申しましたところが  
「喜んで歓迎する」ということでしたので、昨年の秋  
にまいるつもりで、十月二十七日の自民党の総裁選挙  
がすんでからいくつもりが、たまたま十一月には社会  
党の成田委員長、その他の人たちが北京にいかれるこ  
とになっており、だんだんおくれておこうから二月に  
こいということになったわけですが、時期が全く覚書貿  
易といっしょになりましたので、覚書貿易の話をす  
るというように形に想像された方もあるわけですが、私  
に参りました招聘状と覚書貿易の招聘状とは区別され  
てきております。現に参りました後の状況からみまし  
ても、はっきり私の訪中と覚書貿易の交渉団とはわけ  
ている。だからこちら私も私が覚書貿易に直接に関係な  
いと、同時に中国側も必要がないことを認めていた、  
という経緯で、私の訪中というのはそういう意味で周  
総理が扱ってくれたと私は感じております。

北京に着きますと王国権さんや覚書の劉希文、除

明、そういう方々が迎えに出ておられ、そのまま終始  
私に案内役、あるいは接待係、または話し相手として  
ずっとついておられました。主として一般的な問題に  
ついては王国権さんと話をしたんでありまして、北京  
につきました翌日、王国権さんが私の部屋に來られ  
て、打ち合わせと同時にいろいろ話のきっかけをつく  
られて、約二時間位話をした。それからあと三日間、  
私の部屋でなくて、別にホテルの中に部屋をとられま  
して王国権さんと呉曙東さんの二人がこられて、話を  
三回続けてやりました、また帰りがけに一回と合計五  
回、時間からいえば、八時間半ぐらい話し合いをし  
ました。二十三日に周総理にあつたわけですが、王国権  
さんと私はそういう意味でしょっちゅう会っていま  
す。たとえば、天津のおきの第九十六師団司令部に  
行きましたが、片道約二時間ぐらいあります。その間  
王国権さんと私と楊さんという通訳が一人、それだけ  
でいくんですから——二時間全部は話しませんけれど  
も——一時間半ぐらいは自動車の中でも話しました。  
帰りは師団司令部で「まあたい」をいただきました、  
一時間ぐらい自動車の中で居眠りをしましたから、帰  
りは四、五十分ですが、いろんな意味で日本と中国と  
の関係、あるいは国際情勢の見方、中国側の考え方が  
ら、あわせて国内事情——王国権さんは外交官生活が  
長いですから、国内事情ということについては充分だ  
とは私は思いませんがそれでも充分に話をしました。  
そして二十三日にはじめて私どもの一同が周総理にお  
目にかかったわけですが、周総理は冒頭に「あなたと  
王国権との話し合いは全部報告されてきています」と  
言われ、二時間ほど話をしました。帰りがけ三月三  
日の夕方、さらに一時間半程話しましたが、大変にい

そがしい時だったのでしょうか。帰ってきてみると翌日ハノイにたっておられました。そして食事の機会がなく申しわけないけど、お茶がまんしてくれということでした。そういうことで話し合いましたから、いろいろな意味で私達が聞きたいことも、こちらの言いたいこともある程度は話したとおもっています、従ってこれからお話を申上げることについて、中国側の意向というものは全部が全部周總理の言ったことでも、また全部が全部王國権だけの言ったことでもありません。チャンポンにしたものがむこう側のだいたい意向だと思います。それをご了承いただきたいと思えます。ご承知の通り、私は個人的な立ち場で行ったとはいえ、十二月に日中国交回復連盟という超党派の連盟の会長になっております。したがって今後の情勢そして日本の事情からみしてもあるいは国連におきます先般の票決の状況から申しても日本が国交回復ということを一日も早く実現したい。またする方途としてどういう考えをしていくべきかということを中心課題として話を進めたことは無論です。そしていろいろな意味で話し合ってみましたし、むこう側もいろんな角度で説明してくれたと思えます。しかしこの問題について要約しますと、日本と中国との国交回復のための交渉に応ずる前提としては、私は二つあると思うのです。一つは精神的な心がまえ、これは過去において日本が中国大陸に大軍を送って相当に中国の大陸で迷惑をかけた、そういうものに対する反省の上になつて、中国側と接衝するということです。後ほど申しますが、軍国主義の論争の中にも、そういうものに對する反省がたりないということがむこうがわの軍国主義論の中にも入っているのですから、そ

う点が大事だと思います。

具体的な交渉段階に入る問題としては、何といつても台湾問題につきております。カナダ、イタリヤ、あるいはその他の国々が、承認の交渉に入る場合にも必ず台湾問題が出てくる。カナダはそれをどう扱うかというところで一年半かかったのですが、一つのカナダ方式ができましたからそれに続いてトントンと行つてくるような状況だと思います。そういう意味からいまして台湾の問題というのは日本と中国の関係だけでなしに、他の西欧諸国が中国を承認するという場合でも、必ずこれは中心課題として論議されていることはまがいございません。またわれわれとしても容易に避けて通れないことだらうと思えます。

そこで一番私達に質問がありましたのは、「覚書貿易の共同コミュニケの中に日華平和条約というものが廃棄されなければならぬ、ということがあるが、いったいそれはどうだ」ということです。日華平和条約は廃棄されなければならぬということが、コミュニケの中にも書かれましたことについては、私はその会議に出てもおりませんし、その詳細を知っておりませんから私がお答えするのは適當だと思いませんが、ただ私がいろいろ話し合ってみたところによれば、中国側とすれば日華平和条約というものは認めておらんです。自分の認めてない政府との条約、これが前提です。もちろん同時にそういうものを廃棄するか、しないかということは日本側としても考えなきゃならぬ。だが私は、中国との国交回復の一大前提条件として考えなきゃならぬのは一つの中国という点です。台湾をふくめて一つの中国、そしてその代表者というものは中華人民共和国である。そういう認識にたなければ、

国交回復の話し合いにはとうてい入れないではないかと思えます。

そういう意味からいえば日華平和条約を解消するということは前提ではございません。と申しますのは、たとえば日華条約を廃棄しても、仮に台湾共和国というものと、新たな条約をつくることであれば、廃棄したってなんにも意味がないということなんです。周總理だって「現状をみて、ごらんなきさい。あそこは台湾省政府と中華民国政府と二つあるじゃないですか、だから台湾省政府というものを、われわれも台湾省政府だといっているのだ。」

だからわれわれ他民族からいえば、あれは一つのものだ。ただ問題は代表者をどっちにきめるかという選択が残つてる問題ではないかと思う。「蔣政権というのは国民の信頼を失わなければ中国に残つてわれわれと対抗した、信頼を失ったから台湾に行つたんじゃないでしょうか。したがって一つの中国の政府はわれわれの政府だ」と思っています。いわんや最近の国連その他の事情から申しても、逐次国際的な地位が向上しておりますから、そういうふうには判断するのも当然だと思えます。

そういういみで国交回復をするには、そういう割りきり方を日本でもしなければいけない、今の日本の内部からいえば、日中国交は回復したい、これはおそらく九〇パーセント以上だろうと思えます。しかし九〇パーセントの方の中に、その際台湾はどうかならんかというのがあるんじゃないかと思えます。こうした問題について、われわれは国内問題としてこれをどういうふうにしていくか、併わせて考えなければならぬと思えます。

ただ私の感じから申せば、周總理や王国権さんと話をしておりましたも、日本との国交回復を希望し、考えておられるのではないかと思います。それは卒直に申しましてカナダも承認した、イタリヤも承認した、エチオピアも承認したというけど、やっぱり隣のアジアの日本と、戦争の状態がおさまってない関係、そして承認もしてない、そういうことについては、非常に心の上からいって日本との関係を改善したいという希望があるように思います。ことに周總理はかつて留學生として来日されて以来、日本に対して非常に理解があると思います。今はだんだん日本を知ってる人が少なくなっておりますから周總理のような方はごく少数だと思えます。王国権さん、郭沫若さんとか、そういう知日派はだんだん減ってきます。ですからやっぱりそういう知日派は親日家でもあると思います。

いろいろ話してみますとできるだけ日本との国交回復を早くしたい、しかしそうかといつて自分の方から余り急いでもどうだろうかということだと思えます。佐藤總理が国会で、自分の時にはとうてい中国問題はとりあげられないんだといわれたことを材料にしましてわれわれも佐藤さんじゃだめだからもう少しゆっくり先をみているんだというふうなことです。そういうことですから何も今日、明日すぐにやれといつてわけではありませんが、しかし何といつても世界の各国と国交を回復しながら、日本と国交回復してないという事は、隣の国で、そしてもし本当ならばアジア政策その他について忌憚のない話し合いをしていくことができる国として、日本との国交回復を望んでいるというふうな気がいたします。私も安保をやりました大臣でございますから、そうした問題には自ら多くを論

じたわけではございませんが、しかし要するに日本の政治姿勢というものが私は基本的な問題だと思えます。後ほど軍国主義のところでも申し上げますが、何でもアメリカの意見に追従している、その姿勢が困るといふ形で、集団安全保障体制というものを否定してるとは私は思いません。国交でも回復したら、中国と日本との間に安全保障その他の問題について話し合いをすることがいいんじゃないかという感触をうけるような話を私達がきくわけでございます。

それから、問題になつてるのは軍国主義の問題だろうと思えます、この点については二つ三つの問題点があります。

一つは今安保で申し上げましたように日本は、アメリカのアジア外交に対して無条件で協力をしているんじゃないかということ。アメリカとソ連とは大変ちがうんですが、アメリカの現在やつてゐることはアメリカ帝国主義で、ベトナム、カンボジア、ラオスでやつたことは帝国主義として許されることではない。ことにシアヌーク殿下が北京におられますから、その意味ではシアヌーク殿下を強く擁護しているという立ち場もあります。アメリカ帝国主義"という言葉をつかつています、日本の場合には、日本帝国主義という言葉はつかつてないように思えます。日本軍国主義……そこにどういふ違いがあるかということは一つの問題だと思えます。

要するに日本は現実にはアメリカのベトナム政策の中でベトナム化と同じ形で日本が何らかの軍事的役割りをアジアにおいて演ずるのではないだろうか、そしてそれがたまたま例の佐藤・ニクソン会談における「台湾に何かあった場合には日本は重大な関心をもたざる

を得ない」になる。「いったい重大な関心というのは、どういうことになるんですか、軍隊を出すんですか。」というふうな端的な質問になってくるわけです。それは過去に日本のやったことと同じようになる、だから侵略主義が復活するだろうということでしょう、しかしそこまでは言つてない。周總理と話しても独立国が自衛の軍隊をもつことは当然だといつています。しかし近ごろの日本をみると、相当に軍事予算もふえている、今言つたようなアメリカ追隨の姿勢の上に立つて軍事予算がふえたり、あるいは戦争映画ができたり、いろんな意味で……。「日本の若い人は徴兵制にも反対だ、今の自衛隊の隊員募集にしたつて定員通りには集まらない」私はそう言つて、いろんな説明をしたんですが……。「国民の皆さんがそうなつてゐるのではない。一握りの、権力をもつた人の中にそういうふうな考えのもとに行動をしつとあると認めざるを得ない人があるんだ、それは現実の事実じゃないか」といふ点に力を入れてわれわれに話しました、そういう意味から申して、軍国主義論というのが出てくるわけです。そしてそれをいろいろあおる意味において映画だとかいろいろなもの、過去の追憶として出てくる、それは政府がやらせてるんだといひます。「そんなことはない、日本の言論の自由の中で、そういうものをやらそうたつてなかなかいふもんじゃないんだ」と、いろいろ申しますが、しかしやはり日本の新聞をみて産軍共同といわれる、あるいはマラッカ海峡から日本まで石油を護送するために何らかの措置を考えなければならぬという経済人もあると。日本の新聞はよく読んでおりますから、時々出てゐるのが自ら一般的な風潮をおおることになりつつあるというふうになつて

それは現実じゃないだろうか。

例の山本五十六さんの映画なんていうのも出ているわけで、この映画は、ほとんど皆むこうで問題にしている映画だといってます。ただその中で私たちがその話をききながらいろいろな角度で質問したりしてみますと、私は山本五十六さんを知ってます、あの人はそんな積極的な侵略主義者だと私は思わない、と話をいたしますと、「それもそうかもしれない。だが——その辺が我々の気のつかないところでしょうけど——あの映画を通じてわれわれが感得するところは、アメリカに対しては戦争をするのはこりごりだ、戦争しちゃいかん、大国に対しては。その反省が出てくることはわれわれも認めるが、しかし中国に対してはかつて侵略したことに対する反省は一つもでていない。」こういう言い方をいたします。そういう点についていろいろの隔意なく懇談をしてみますとたとえばこういうことをいう。

「ああ満州国という、日本の諸君が一握りの軍閥に動かされその犠牲になって満州国なんかで死んだりした。その人たちを追憶し、丁重に弔いたいという気持、あるいはそういうことを回顧するという気持はわからんことじゃない、当然そういうことは考えられましよう。われわれはそれに対して、直接に文句をいいたいとは思わない、しかし満州国ができたということは、中国人にとって最大の侮辱である。かつてそれは西欧諸国が中国を侵略した。しかしよその国にきて、かつてに国を作ってそれを左右したという経験は、イギリスに香港をわたしたとか、いろんな形であったが、そういうことではない。日本人の力で満州をつくった。これはわれわれとしては許すべからざるこ

とだと思ふ。われわれは日本と中国との間の関係をできるだけ改善しようと考へて、その問題はわれわれの頭からできるだけ忘れていかななくてはならないと思つている。それなのに、日本のそういう問題でわれわれが刺戟されるような書き方があると、われわれは反撥するという気持がある。けしからんという気持にならざるをえない」。私はそういう説明をききました時に、なるほどわれわれが考へなかつた点にふれてるんじゃないかと思ひました。むこうも日本のなくなつた人の追憶、顕彰はわからんことじゃない、ということであれば、われわれもそういう点について国交を回復してちゃんといくまで、若干自制することが必要ではないだろうか、同時に自制の上になつてむこう側にも考へてもらふことが必要ではないか。いずれにしても、こうした問題は、相互理解が不足してるところからきているのではないかと思ひます。従つてもっと大勢の皆さんが中国にいかれて、こうした問題にそれぞれの角度からお話しあいをなさつて、そしてむこうの気持をつかんで、またそれに対応して、日本も立場を変えていくということが大変に必要なことであつて、そのこと自体は決して卑屈なことではないと思ひます。しかし、話し合ひの基礎にむこうの気もちをくんでいくという気持がなければ、こうこじれてまいりました日中間係を打解していくことはできない、と思ひます。

まだいろいろ、軍事予算の問題も物価高の現状からいって、説明しましたが略しまして、結局「何らかの形で軍国主義的行動をおこそうという活動が、現実におわれわれがみていればある。日本は、日本の平和と安全のために朝鮮半島が平和と安全でなければならぬ」として朝鮮半島をとつた。そして朝鮮半島をふくめた平和と安全のために満州国をつくらなければならぬ。満州国をつくるには中支に対してもう少し索制しなくちゃならぬ——日本の国民はご存知なかつたことだろうが、われわれもしらなかつた——そういう過去の経験を考へるとわれわれは今、現実にあるそういう一握りの勢力でもうかつにしていれば日本国民をひっぱつていくかもしれないと思ふのはあたりまえじゃありませんか。「こういういい方もいたします。そういうことでわれわれも考へていかなければならぬことが多分にあります。何としても戦争の結末をつけてしまわなければならぬ。それは国交回復ということであらうかと思ひます。

今年行つてみて私が著しく感じましたことは、文革が昨年収拾段階だつたと思ひますが、今年は文革をおえて新しい段階に一步ふみだしたんじゃないかという事です。これは私ばかりでなく、行きました人が一様に感じたことで、この一年間の変化というのは相当に大きい。それは一つは国際情勢が有利に展開してるといふこと、もう一つは食糧事情が非常によくなつてきている、といふこともあるように思ひます。従つてそういう面で安定しながら新しい建設に進んでいくとてるといふことがいえると思ひます。したがつてたとえわれわれが昨年まいりました時には、万里の長城はみせてくれといつてもつれていってくれませんでした。だが、今年はよろこんでつれていくといふことでした。ただ雪がふつたものですから、とうとういかなかつたんですが、また写真なども北京市内の山の上から、昨年はとらないでくれといわれてたが、今年はずいぶん気であつてくれた。覚書事務所の職員も「昨年秋季、自分たちは家族づれでいく行動の範囲が広がくなつ

た」といってました。そういういみでおちついてきてました。昨年は工場見学の時も説明の中で異口同音に「劉少奇路線の洋奴哲学によるものなので、これを廃止した」というような説明が入った。今年はまだあまりそういうことは聞かないで中に入るということでした。そんないみで何となく新しい段階に進みつつあるんじゃないかと思えます。

それから文革でつかった若い青少年のエネルギーを、非常につよく国を守るということと、産業活動につかっています。

産業活動を拝見してまいりましたけれども、これはそう完べきなものでないことは事実ですが、しかし非常に皆が一生懸命に働いている。われわれのみせてもらった工場の工作機械は優秀なものではございませぬ。が、工員の諸君はたりないものは手づくりでつくって能率を上げていこうという調子で、そのやり方が将来、中国の働らいてる人たちの工作技術のレベルをあげるんじゃないかという気がいたします。従って今のような状態でいけば五年十年後には、相当な工作力が出てくるんじゃないかという感じがいたしました。そういういみからいって国交回復していわゆる劉少奇の洋奴哲学路線、何でもひもつきで外国におそわるというんじゃないか、日本人からききたいということとはたくさんあるんじゃないかと思えます。地下鉄もみましたが、地下鉄にのる前に、むこうの革命委員の副主任ぐらいが「われわれは地下鉄でも全部国産で作ってるんだが、日本の皆さんは地下鉄にのってる経験がある、乗ったらアドバイスしてくれ」といってました。電気炉の工場でも中級技術者しかいないから大学の研究室に四人の工員を出して、こういうものにとりかかった

という話をしておりました。その過程で「北京の日本の展示会でこういうものが出品されるということである。こんで見にいこうと思ったところが、日本政府は出品を停止させた。あれはいかんだった」といってました。

日本の工業力を高く評価していることは事実でいろいろおそわりたいといっています。

対等の意味で物がいえない、そういういみで一日も早く国交を回復して対等の立ち場で物をいいながら協力体制をつくっていくということが日本の将来を考えると私は必要だと思えます。それは経済ばかりでなく、政治外交の問題もふくめて……。

近ごろ国益ということがいわれるんですけど、私はそれこそ国益にそった線であると思えます。

原理事長 どうもありがとうございます。では質問にはいりたいと思えます。

宮本（朝日イブニング・ニュース） 日華条約を破棄しなくても国交回復の交渉ができるという感じをうけられたといわれましたが、具体的に周首相、王国権さんあたりのどういうことばからうけとられたかお聞かせ願いたいと思えます。

答 日本と中国との国交回復という問題は、一つの中国ということ前提にして、台湾はその省であるという立ち場を堅持すれば、それは事後でも解消されるわけですね、だから時期だけにこだわらんと私は思いません。向こう側からいえばあれは認めていない条約、無いと思ってる条約なんだから、その条約を解消するという必要はないと思ってる。周首相ではないが、言葉の中でできます。

ジェームソン（シカゴ・トリビューン） 中国の宇

宙衛星、核開発についてお話をさらなかつたんでしょか、なされた場合はどんな点についてお話をさらなでしようか。

答 全然核開発の問題にふれなかつたわけじゃありません。むこう側は「核を国際平和のバランスの上でもっていなければならぬので、使うために作ってるんじゃない」と強く主張しています。

松本（フジテレビ） 日本がこれから中国と国交回復交渉をする場合には、いわゆるカナダのテーク・ノート方式では無理だろうと伝えられているんですが、これはむりなのか、むりならどうしてむりなのか。

答 私は今度のいろんな話し合いを通じて、テーク・ノートという形において、もし会談にはいれればそれは成功だと思えますよ。しかし今のような感情的な食い違いが強い場合は、会談自体にも入れないんじゃないかと思えます。それはやはり日本が隣の国であって、台湾に対して経済的にも過去の政治的にもいろいろな繋がりをもっている。ですからカナダ、イタリアとは違うんだという意識があると思えます。それは佐藤・ニクソン会談の中の台湾の問題にもふれてそういうことがいえるんじゃないかと思えます。ですから日本に対してはカナダ、イタリアよりも少し厳しいんじゃないかという判断をいたしております。

若松（中日新聞） 先程藤山さんがおっしゃいましたようないわゆる相互理解をふかめていく上においても記者交流の問題がやはり一つの手段としてのぞましいのではないかと思うのですが、この問題は北京で話題には出ませんでしたか。あるいは何かこの点で感觸としておかんじになったことがございませんでした

か。

答 この点では私も出しましたし、一行に田川君がおりますから、田川君からも出しました。その時のあれですと五社ですね。五社ぐらいを充足させ相互に交換するのが適当じゃないだろうか、という考え方をのべておりました。三社でなくて五社ぐらいにやるのが現状では適当ではないかというのが周總理からの感触です。それと同時にですね。新聞関係の方に印象を申し上げれば、やっぱり新聞社の中で、外報部の方でなくても政治部の方にも希望者に中国語を習わせて将来、特派員になるような養成をしていた方がいんじゃないかと思えます。たびたびこれからのいかなきやならんですから。中国語ができないというのは難点だと思えます。むこうは日本語がよくできるんですよ。新華社の方でも……。

質問（読売） 中国は建前として国連に対して米帝国家主義の道具というような原則論を出しているわけですね。そういう中国が仮に今年の秋あたり国連にはいるようになった場合、喜んではいらぬ用意がありますかどうか。

答 前にインドネシアなんか脱退した当時、別の国連をつくるなんてことをいっておったですけど、今そんな考え方はないし、むしろ国連がこれを迎え入れて常任理事国にも入れようというような動きがあるわけでしょう。それに対応していくような形をとってる。ただ自分の方から入れてくれとは金輪際言わないだろうとは思いますが。しかし拒否するようなことはないと思えます。

広芝（大和タイムス） 素朴な国民感情として伺いたいですが、藤山さんは、第一次安保改定の時の責任者の

一人だった。その藤山さんが、今度は中国問題にとりくむというのは、大変矛盾しているという感じがするが……。

答 私はよくいろんな機会に言うし、これは私のおやじ以来の考え方だというのですが、日本はアメリカと中国の両方と仲よくしていかなくてはならない、ということですよ。私は現にそれが日本の将来のためにも正しいと思えます。ですから私自身はやはりアメリカとも中国とも仲よくしていくと、ただ今の現状からいえば、中国とアメリカは大変に、アメリカ帝国主義だとかベトナム戦争その他で対立しています。この間に日本がたつて橋渡しをする立ち場に私はないと思えます。

日本は、中国と国交でも回復したら、本当の橋渡しができる立ち場になろうと思えますけれども、国交も回復してないで、両方から笑われます。ですから私は将来ともそういう考え方でいって、矛盾はないと思えます。アメリカは過去において、他の西欧諸国あるいは日本とちがって、中国を侵略したことはございません。戦争中はむこうの人もいうように国民党、共産党ふくめてアメリカは援助してきています。だからただ問題は台湾一つにかかっているわけです。かつて満洲国を侵略したとか、あるいはソ連が旅順をとったとか、青島をドイツがとったとかいうのは、アメリカにはないんです。ですから今度の私の話の中でもそういうニュアンスが出てくるんですが、ちょうど覚書の方々が会った時にも同總理が「存外、アメリカと早く外交転換する場合がありますけれども、早くとわかれたらいいです。」

ですから私は日本の国策として両方と仲よくしてい

く。私はその信念でやります。

質問 日中国交回復のあかつきには日本と中国の間で、安全保障について何らかの話し合いをしていいのではないかと中国側が思っているような感触を得た、というお話でしたが、これは具体的にはどういうふうにとつてよろしいのか。その場合、中ソ条約、日米安保条約との関係はどうなるか。

答 具体的には何とも申し上げかねます。しかし国交回復した上で、われわれは少くとも中ソ友好同盟条約の中の敵国条項だけはとってもらいたいですね。いんな意味で……。そういう問題をお互に平らな気持ちで話す事態ができるんじゃないでしょうか。ですから国交回復した後の安保というものの形も私は変わってくるんじゃないかと思う。もしアメリカの中国接近というような方法がとられればなおさら変わってくるんで、事前に日米安保を廃棄しろとか何とかいってるんじゃないですから、国交回復後の問題として広範囲に考えていっていいんじゃないかと思えます。

荒井（NHK） 一つの中国ということからですが、中国としては台湾をどのように処理していかうと考えているのか。形をかえた国共合作だとか自治区とかいろいろあると思えますが……。時間的要素を加味してそういう話があったのかどうか。

答 どういう形でかは、私ははっきり申し上げるような材料をつかんでおりません。しかし何らかの形で話し合いをつける努力はするんじゃないかと思えます。そういう立ち場そのものは私は話し合いがつくなら北京がそんなに台湾をにくんで扱うということは無いんじゃないかと思えます。

お知らせ

クラブ員で、趣味の同好会（碁、将棋、釣、ゴルフなど）や特殊な外国語の勉強会（インドネシア語、韓国語など）を開いてはどうかという話が出ております。これについて、ご意見なり、ご希望がありましたら事務局までお知らせください。

事務局に万博映画の割り引き券（六〇〇円を四五〇円に割り引き）があります。希望者は代金四五〇円を添えてお申し込みください。（枚数に制限はありません）。

マークを募集します

日本記者クラブのシンボル・マークを募集します。ジャーナリストのクラブにふさわしい図案をおよせください。

応募資格 日本新聞協会、日本民間放送連盟  
加盟社の社員  
締め切り 五月三十一日（月）  
賞金 入選 三万円（一名）  
一席 一万円（一名）  
佳作 二席 五千円（二名）

（送り先）日本記者クラブ事務局  
1、審査は、クラブの総務委員会が行ないます。  
2、一人で何点応募されてもかまいません。  
3、各作品には、社名、所属部名、お名前をかならずご記入ください。  
4、応募作品は、返却いたしません。

バーのお知らせ

会員の皆様から、強いご要望がありましたので、四月一日からクラブのバーに日本酒と簡単なかん詰めを用意いたしました。ご利用ください。

日本酒（菊正宗）特級 二〇〇円  
コンビーフ 二五〇円  
オイル・サーデン 二〇〇円

お願い 会員社の住所、電話番号、会員の役職変更などがありましたら、なるべく早く事務局までお知らせください。

（参考）

マーク募集については三月号の会報でお知らせしましたが、一、三お問い合わせがありましたので、ご参考までに以下お知らせいたします。

- 一、日本記者クラブのローマ字略称——規約にNIPPON・KISHA・CLUBとなっておりますので「N・K・C」が略号になります。
- 二、ワシントンのナショナル・プレスクラブのマークは「みみずく」です。夜も目を見張っているという意味でしょう。レターヘッドの外にネクタイピン、カフスボタン、ネクタイの模様などに使われています。
- 三、応募資格は、新聞協会、民放連の加盟社の社員であれば、当クラブの会員でなくてもかまいません。

四月行事

- 5日（月）午後4時～5時30分 第19回企画委員会（クラブ）
- 6日（火）午後4時～5時30分 第17回理事会（//）
- 7日（水）午前10時30分～正午 西独連邦カルテル庁 ギュンター長官記者会見
- 8日（木）午後12時30分～2時30分 昼食会（帝国ホテル 菊）
- 9日（金）午後4時30分～6時 ラオスカンパニヤ外務大臣代理記者会見（クラブ・ルーム）
- 13日（火）午後5時 試写会（東宝試写室）東宝映画「幻の殺意」
- 15日（木）午後3時～5時 日ソ漁業交渉団モイシエーエフ団長記者会見
- 26日（月）午後3時30分 試写会（読質別館7階）「書を捨てよ町へ出よう」
- 4日（火）午後2時～4時 フランス文化使節 ロジェ・カイヨワ氏講演会
- 12日（水）見学会II横須賀米海軍基地

五月行事予定